

長野市中央通りを対象とした回遊行動促進の要因分析

長野工業高等専門学校 学生会員 宮原 誉弥 長野工業高等専門学校 学生会員 長峯 史弥
 長野工業高等専門学校 正会員 柳沢 吉保 長野工業高等専門学校 正会員 轟 直希
 長野工業高等専門学校 学生会員 清水 春来 金沢大学大学院 フェロー 高山 純一

1. はじめに

長野市では、中心市街地において「歩いて楽しいまち」を実現するために、平成16年から平成20年までGW中あるいは秋季にトランジットモール(TM)社会実験(ふれ愛通り)が実施され、平成23年からは善光寺表参道中央通りの歩行者優先道路化事業が進められている。本年度で中央通り新田町交差点から大門交差点までの第1期事業区間が完成する予定であり、歩行者優先道路化事業による歩行環境の改善の程度が、歩行者の回遊行動に与える影響を明らかにすることが重要である。

市街地内の回遊行動分析に関する既往研究として、柳沢ら^{1),2)}は、TM導入による移動距離拡大と回遊トリップ数の促進効果を実証的に明らかにしている。しかしながら既往研究では、歩行者優先道路化事業による歩行環境の向上と、市街地内回遊トリップ数の関係を明らかにし、事業による効果を評価した研究は少ない。

本研究では、長野市中心市街地を対象に、TM社会実験が行われた平成16年～18年および平成24年の歩行者優先道路化事業時に収集した来街者の回遊行動実態調査データを用いる。それらのデータから、TM実施時と歩行者優先道路化事業時について、市街地内での回遊パターンと移動距離、回遊トリップ数の実態を比較分析し、立ち寄り施設の魅力度および移動空間の魅力度が回遊トリップ数に与える影響を分析する。

2. 長野市中心市街地回遊行動調査の概要

(1) 分析対象地域と調査方法

歩行者優先型の交通施策が進められている長野市中心市街地中央通りを中心とする対象地域を図-1に示す。平成17と18年には、中央通りにて終日TMが導入されており、実施区間長は約700m、TM区間中イベントエリアは8箇所、平均歩道幅6.2mの条件で行った。平成18年には、TM区間北側にて新たな商業施設がオープンした。調査方法は、来街者に対してアンケート調査を用いた。



図-1 分析対象地域

表-1 主要調査項目

項目	概要
来街行動	発地点、交通手段、所要時間、運賃、活動拠点(交通結節点)
回遊行動	市街地内回遊ルート、立ち寄り施設、利用交通手段
購買行動	使用金額、滞在時間
満足度	各交通施策等に対する満足度
個人属性	属性、利用可能手段、来街頻度等

表-2 配布・回収状況

(平成)年	15年	16年	17年	18年	26年
実施月	11月	5月	5月	5月	7月
配布数(部)	1500	3000	4000	4000	3000
エリア	長野市中心市街地(中央通り・長野駅周辺)				
回収率(%)	20.1	10.4	13.0	13.0	13.6

(2) 調査項目と実施状況

本研究では、長野市中心市街地を対象に、来街・回遊実態調査を行った。なお、アンケート調査票の配布・回収には、中心市街地内の歩行者を対象にアンケート調査票を直接手渡し、後日、郵便にて回収する方法を用いた。アンケート調査の主要調査項目ならびに配布・回収状況を表-1および表-2に示す。

3. 長野市中心市街地の回遊行動比較分析

(1) 交通施策の違いによる回遊範囲の比較

交通施策の導入が市街地内の回遊トリップ範囲に与え

表-3 回遊規模と主目的

クラスター	特徴 (回遊範囲)	回遊規模 (%)		H26 主目的割合 (%)		
		H17	H26	買物	観光	娯楽
①	全域	31.5	20.8	18.3	40.2	25.6
②	中央通り～善光寺	13.7	12.2	25.0	25.0	22.9
③	仲見世～善光寺	11.2	22.5	21.1	51.1	17.8
④	権堂	26.9	27.9	29.9	1.0	38.1
⑤	長野駅	16.7	16.6	54.5	13.6	12.1

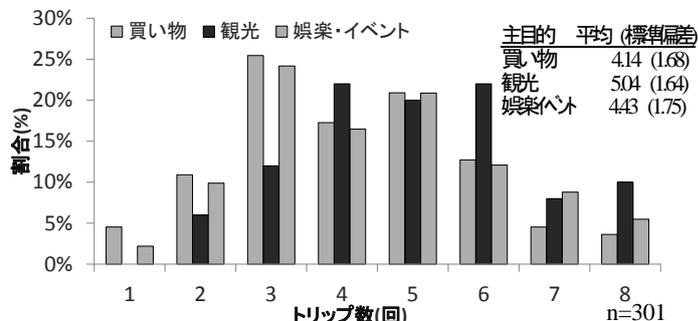


図-3 主目的別回遊トリップ数

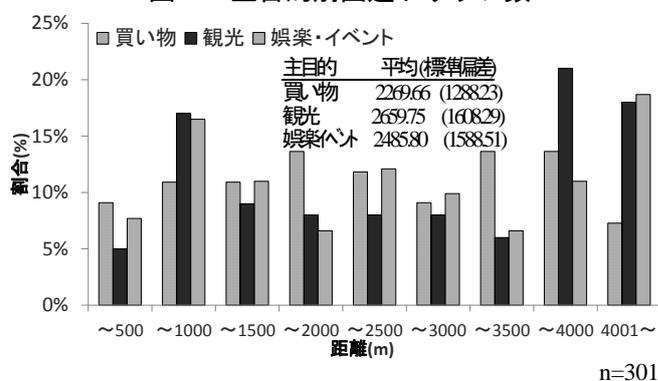


図-4 主目的別総移動距離

距離の割合を図-3 および図-4 に示す。

図-3 および図-4 より、買い物主目的においては、比較的トリップ数が少ないことから、目的が達成されれば、余分な移動をせずに回遊を終了する傾向が強い。一方、観光においては、トリップ数が多く、表-3 から分かるように全域に渡る回遊する傾向が強い。

4. まとめ

長野市中心市街地来街者の回遊範囲は、平成 17 年に比べ、平成 26 年は中央通り周辺に回遊範囲が広域化していた。特に観光主目的来街者への効果がみられた。今後は、施設の集積度や移動経路の魅力ある移動空間の連続性、移動経路の移動空間と立ち寄り施設の評価などの関係を明らかにしていく。

<参考文献>

- 1)柳沢, 高山, 轟: 中心市街地回遊トリップ特性に着目したトランジットモールの導入効果に関する評価分析, 都市計画論文集, pp.31-36, 2006.10
- 2)柳沢, 高山, 轟: 長野市中心市街地を対象とした来街者の行動特性とトランジットモール導入による回遊行動促進効果の分析, 第 25 回交通工学研究発表会, 論文報告集, pp.129-132, 2005.10

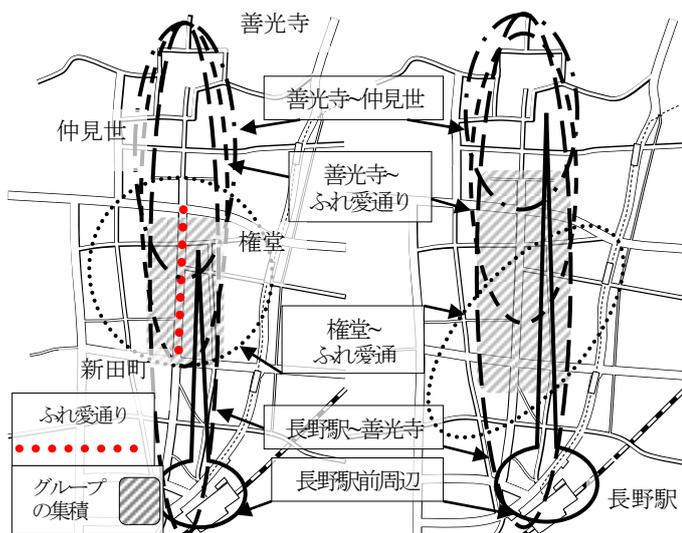


図-2 回遊トリップ範囲の比較分類 (左: H17, 右: H26)

る影響を分析する。なお、分析にあたっては、TM実施の範囲を拡大した平成17年と歩行者優先道路化事業中の平成26年のデータを用いる。全ての来街者を対象に、市街地内で立ち寄ったゾーンを街区で分類することで、市街地内を巡る回遊トリップ範囲をグループ分けした。非階層クラスター分析を適用することで立ち寄りゾーンの分類を行う。クラスター数は最も適合性の高いものを適用した。また、各ゾーンの立ち寄り割合の基準値を算出し、各クラスターの特徴を判別した。結果を図-2に示す。

図-2 より、①中央通り全域回遊グループ、②中央通り～善光寺回遊グループ、③仲見世～善光寺回遊グループ、④権堂回遊グループ、⑤長野駅周辺回遊グループ、の5つのグループが抽出された。それぞれの回遊範囲を比較すると、平成 17 年は中央通り(TM 実施区域)に各グループが集中しているのに対して、平成 26 年ではそれぞれのグループの回遊範囲が広域化していることが明らかとなった。

(2) パターン別回遊範囲の比較

前項で示したグループごとに構成割合や主目的を平成 17 年と 26 年で比較した結果を表-3 に示す。

表-3 より、広範囲を回遊する①グループの規模が小さくなり、より回遊範囲の限定されたグループの割合が大きくなっている。特に観光主目的の割合の多い③仲見世～善光寺回グループの規模が大きくなっている。

(3) 主目的別回遊トリップ数および移動距離の比較

来街主目的によって回遊行動特性は異なると考えられることから、主目的別の回遊トリップ数と総移動